

死別体験と死生観に関する研究の現状と課題

西川 亜結

要旨：本研究では、死について考えるきっかけと考えられている死別体験に関連する研究を整理することで、死別体験が死生観に与える影響について検討することを目的とした。死別体験と死生観に関する研究について、量的研究では、研究により死別体験の有無が死生観に影響を与えているか否か、または影響している因子についてもバラつきが見られ、量的なものや経験の有無だけでなく、質的なものを組み合わせることにより、どういうプロセスを辿って死別体験から死生観が形成され、影響を与えていくのか検討することが重要となってくるのではないかと考えられた。質的研究からは、死別体験といっても様々であり、故人との関係性、看取りに向き合う姿勢や、死別後の行動などの違いから様々な過程をたどっていつていることがわかった。ただ「死別体験の有無」を問うだけでは、死生観と死別体験の関係性や特徴が捉えきれない可能性が考えられ、今後の研究では、死別体験の有無だけでなく、それに関連する要因について検討していく必要があると考える。

キーワード：死生観, 死別体験, 文献研究

問題・目的

死とは生きている限り避けられないものであり、誰もが直面する問題である。現代において高齢化社会の問題や、医療技術の発展により延命治療が可能になったことなどから、デスエデュケーションが注目され、死までの時間をどう生きるかについて考える機会が増えている。

佐藤・田中（1989）は、死に関して高齢者は死を自分のものとして反応する者が若干多く、若年齢層では客観的に述べるものが多くなる傾向があることを示唆した。高齢者は自身の衰えや病気などから、死を身近に感じているため、このような結果になったのではないかと考えられる。若年齢層では死を客観的に捉えている傾向にあるとされるが、どういった経過をたどり、死を意識し、死生観が変わっていくのであろうか。仲村（1994）は、死別体験が子どもの死生観に大きな影響を与えることが考えられると述べている。狩谷・渡會（2011）の研究でも、死について考えた要因として、「身近な人の死」と回答した人が全体の36.3%と最も多く、次いで「家族の死」が29.8%、「ペットの死」が19.9%であった。死別は誰もが経験しうるものであり、避けては通れないものであると考えられる。

本研究では、死生観を「死と生に対する態度」と定義し、死について考えるきっかけと考えられている死別体験に関連する研究を整理することで、死別体験が死生観に与えている影響について検討することを目的とする。なお、宗教観や文化に違いがあると死生観にも違いが見られる可能性があるため、本論文では日本の論文のみを取り扱うこととする。また、2020年の10月時点で、Google Scholarにおいて引用文献を含まずに「死生観」で検索してヒットした数は7390件であり、死生観への関心の高さや研究の重要性が注目されているということがわかったが、その中でもより死生観研究について重要な役割を担っている論文を探すために、本論文ではレビュー論文を利用し、レビュー論文で取り上げられていた主要な研究を中心に検討する。

死生観研究の概観

死生観に関する尺度

まず死生観を理解するにあたり、死生観に関する尺度についてまとめた(表1)。丹下(1999)の青年期における死に対する態度尺度、平井・坂口・安倍・森川・柏木(2000)の死生観尺度、隈部(2006)のDAP-R(Death Attitude Profile -Revised)の日本語版から、死に対しての恐怖や不安、死は苦痛などからの解放、信仰などに関連する死後の世界感などが共通していることがわかり、死生観における宗教観、信仰心などの重要性、また「死」を恐れたり回避したりする反面、軽視したり死ぬことで生きている中でうまれる苦しみから解放されると考えたりするといった面があることが分かった。死は一般的に、不吉で話題に出してはいけないなどのタブー感があるが、それは死に対する恐怖感などネガティブに捉えられがちな側面や、死について考えたくない、生きたいという思いからくるものである可能性が考えられる。しかし、「人生に対して死が持つ意味尺度」や「人生における目的意識」の因子から、死には人生における目的を考えるなどの影響を与えるポジティブな側面があることなどがわかる。これについては、丹下(1999)が「死に対する態度」を多面的な視点から捉え直し」と述べているように、死に対する恐怖などのネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面など多面的に死を捉えようとしたことが影響していることも考えられ、死を多角的に捉えていくことが今後も必要とされているということが考えら

表1 死生観尺度と因子

尺度名	作成者	因子
青年期における死に対する態度尺度	丹下(1999)	【死に対する恐怖尺度】存在の消滅や死の未知性、未完の終結などへの恐怖を表す。 【生を全うさせる意志尺度】自殺の否定および状況は問わず「生」自体が目的とする。 【人生に対して死が持つ意味尺度】死が人生に肯定的な作用を持つとする。 【死の軽視尺度】死を他人事や苦難からの解放とする。 【死後の生活の存在への信念尺度】霊魂永続性を信じる。 【身体と精神の死尺度】身体が生より心の死を重視する。
死生観尺度	平井ら(2000)	【死後の世界感】「死後の世界はあると思う」「死んでも魂は残ると思う」等の項目からなっている。 【死への恐怖・不安】「死ぬことがこわい」「自分が死ぬことを考えると、不安になる」等の項目からなっている。 【解放としての死】「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」等の項目からなっている。 【死からの回避】「私は死について考えることを避けている」等の項目からなっている。 【人生における目的意識】「私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している」等の項目からなっている。 【死への関心】「死とは何だろう?」とよく考える」「家族や友人と死についてよく話す」等の項目からなっている。 【寿命観】「人の生は目に見えない力(運命・神など)によって決められている」等の項目からなっている。
DAP-R 日本語版	隈部(2006)	【接近型受容】信仰により死を肯定的に受容する態度。 【死の恐怖】死の恐怖や不安。 【死の回避】死を考えようとする態度。 【逃避型受容】苦痛や苦悩からの解放として死を受容する態度。
Death Competency 尺度	藤本・本多(2003)	【身近に起こりうる死について考える能力】自分にとって身近な死について自ら積極的に考え、それを表現できる能力。 【身近に起こりうる死に対処する能力】自分にとって身近な死を想定し、いつかは来る死に対して心の準備をし、冷静に対処しようとする能力。 【死に対する親和性】自分自身にとって死はいつか訪れるものであるという現実を受け止め、死を身近なものとして捉えることができる能力。 【他者の死を受けとめる能力】自分と関係ない人や現実でない人の死に対して、自分とは関わりのないものとするのではなく、自分に親しい人にも起こりうる現実と捉え、それをきっかけとして死について考えようとする能力。 【死を意味あるものと認める能力】「死」が「生」に対して肯定的な意味を持つと考えることによって、「死」をポジティブなものとして捉えようとする能力。

れる。

藤本・本多（2003）は「死に対処するための能力」である *Death Competency* の尺度を作成し、死に対処する能力は、実際の死別体験だけではなく、死についてどれだけ考えているかが影響していると考えられると述べている。また、藤本・本多（2003）は *Death Competency* 尺度と、青年期における死に対する態度尺度（丹下，1999）の相関についても見ており、死に対して不安や恐怖が高いと、身近に起こりうる死に対処できなくなる傾向があるが、不安の恐怖や強さが他者の死をきっかけに自分の死を考える能力に影響を与えるわけではないということを示唆した。

これらの尺度から、死への恐怖や不安、死を苦痛からの解放として捉えるなどの共通点も見られたが、死と生に関する考えについて測定するだけでなく、死に対処するための能力を測定するなど目的や対象者等によって内容に差があることが分かり、死を様々な角度から捉えようとしていることが分かる。そのため、その研究に合った尺度の使用や、複数の尺度を組み合わせる必要もあると考えられる。

先行研究から見た現状と課題

竹山・岡光（2018）の研究では、青年期にある学生において死生観形成の影響要因は「死別体験」や「マスメディア」などであり、医療系の学生は「死生観に関する講義」や「臨地実習」も影響していることがわかった。海老根（2008）は、看護師や看護学生などの特殊集団を扱ったものに比較し、一般集団の死生観を扱った研究の少なさや、死に関するネガティブな感情が扱われることの多さ、誰にとっても死が不明瞭な点等について指摘し、学校現場で行われてきた死生観の育成に関する研究を中心に概観している。その結果、小学生を対象とした研究では動物の死の活用や、家族の対話を取り入れるなどの工夫がされているものが多く、中学生を対象としたものでは配慮という言葉がキーワードとなり、教育者側のタブー視が最も強い世代であること、高校生を対象としたものでは理解度に応じた知識型の講義も増えているという特徴があり、研究結果に量的なデータが存在するものが多いと述べている。田中・斉藤（2013）の研究では、各発達段階における死に対する態度研究について検討しており、幼児期から児童期にかけて一般的な「死」がどのようなものであるかについて理解するようになって考えられていることや、児童期から青年期にかけては年齢の上昇とともに死に対する恐怖や不安は低下する一方で死後の世界を信じる傾向が強くなること、青年期後期では中年期や老年期に比べて死に対する恐怖が強いことが示され、中年期以降では自らの身体の衰えなどから死を意識するようになって考えられること、また加齢に伴い死に対する恐怖は減少していくことが言えると述べている。これらの文献研究から、死生観形成において、年齢や理解度に応じた研究や教育がなされていると考えられる。

川島（2010）の研究では、死の心理学における質的研究は十分に蓄積されておらず、量的研究によるものが圧倒的多数を占めている現状について述べ、死の心理学における質的研究の展開について検討している。その中で川島（2010）は、質的研究が死に対するものの見方を大きく転換させる可能性を秘めていることの意義は大きいと述べている一方で、今後の課題として、質的研究を通じて提案された新しいモデルが研究を牽引している領域もあるが、まだまだ不十分であり、単なるケース報告や語られた内容のカテゴリー化に止まっている研究も散見されると述べており、質的研究が安易な研究となる危険性について触れている。京田・加藤・中澤・瀬山・武居・神田（2009）は、死を意識する病を抱える患者の死生観に関連する論文について検討しており、日本において1999年から2009年の10年間の研究で、死を意識する病を抱えた患者に関連した研究は約90%が質的研究ということがわかった。また、竹山・岡光（2018）は、青年期にある学生の死生観に関する研究について検討しており、2005年から2018年の13年間の研究で、青年期にある学生の死生観に関する論文において、26件中25件が量的研究であったということがわかった。このことから、対象者によって死を取り扱う際に特に注意が必要となる場合には、対象者の様子を見ることができると面接法や、研究者が直接的に介入して積極的に聞かず済む診療記録や看護記録、日記などを分析する質的研究の方が多くということが考えられる。また、特に注意が必要な対象者でない場合に量的研究が多いことに関しては、死というタブー視されがちな内容について、面接の場などを設けると警戒されやすかったり、逆に普段から死について考えていない、あるいは考えることを避けている人にとっては負担になりやすかったりするのではないかと考えられ、量的に尺度などを使って質問紙を取る方が、答えやすかったり途中で回答をやめやすいのではないかと考えられる。しかし、年齢により死への理解度が変わる

ということからも、死別を体験した時の年齢や理解度なども検討する必要性があり、死別体験に関連する研究について、量的研究、あるいは質的研究のどちらかだけでは、十分に検討しきれていないのではないだろうか。死別体験に関連する研究について、量的、質的の両側面から見ていくことで、死生観の形成されるプロセスや、死生観形成に影響を与える死別体験の内容等、理解につながるのではないかと考える。以降では、死別体験と死生観について、量的研究と質的研究の両側面から検討していく。

死別体験と死生観

量的研究

森末 (2003) の 30~60 歳代の非医療従事者を対象とした研究では、自分の現在の死に対する態度に最も影響があったものは「親近者の死」と回答した人が最も多く約半数を占めており、個人の最初の死との出会いは約 80% の人が肉親との死別を挙げていた。また、死に対しては、自身の死について 60% 以上の人々が稀にしか、または全く考えていないと答えており、これについて森末 (2003) は「死に対する準備がなされていないことが伺える」と述べている。長崎・松岡・山下 (2006) の非医療従事者を対象とした研究でも、死を意識するきっかけとして「大切な人の死を通して」が最も多く全体では 58% であり、50 代以上は体調や年齢に伴って死を意識する傾向が見られた。また、50 代以上が 40 代までの人に比べて死を意識した具体的な行動が見られたことに対し、長崎ら (2006) は 50 代、60 代は親族を看取る機会が多いことや、加齢に伴う体力の衰えなどが影響し、死を身近に感じ、死を受け入れる準備が始まっているためだと思われると述べている。誰の死を考えるかについては一人称の自分の死が全体の約 5 割であるのに対し、家族の死は 7 割であり、家族の死を考える人が多いということも分かった。これらの研究から、身近な人との死別が死を考えるきっかけとなり、死生観形成に影響を及ぼすということが示唆された。また、死別を体験していても自身の死について考えることがない人もいるということや、自身ではなく身近な人の死について考える人が多いことが伺え、年齢や健康も関係しているが、死を受け入れられない人や、自分自身の死について考えられていない人の存在が見受けられる。

藤本・本多 (2003) は近親者との死別体験の有無が Death Competency に与える影響について調べ、「身近に起こりうる死について考える能力」は「死別を体験することにより、現実的に死について考え、周りの人々と話したりするきっかけが与えられたため」に死別体験をしたことのある人の方が高い能力を持っていること、「いつか自分に訪れる死を、現実として受けとめるきっかけは、実際に死別を経験することで与えられるのではないかと考えられる」ことが示唆された。また、死別体験の有無によって差が見られなかった「身近に起こりうる死に対処する能力」「死を意味のあるものと認める能力」から、「死別を経験したからといって、身近に起こりうる死に対して冷静に対処できるわけではない」こと「死を肯定的に捉えようとする態度には死別経験の有無は関係していない」ことが示唆された。

一方で富松・稲谷 (2012) の研究では、重要な他者との死別を体験している人は、していない人よりも死が人生に肯定的な作用を持つとし、死に意味を求める傾向があることが分かった。この結果は、藤本・本多 (2003) の「死を肯定的に捉えようとする態度には死別関係の有無は関係していない」とする結果とは違っている。また、田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・國次・芳原 (2001) の研究では、青年期において臨終の立会経験がある人はない人よりも、年を取った時に死について不安になる傾向があり、壮年期では臨終の立会経験がある人はない人よりも、自分の死を悪夢のような苦しみだと思っておらず、死ぬことが恐ろしいと感じていない傾向があることが分かった。このことから、死別体験は死生観に影響を与えていると考えられるが、田中ら (2001) は、青年期は壮年期に比べ死別体験や介護経験が少なく、一般的に実生活の中で死を考える機会が少ないと思われるが、青年期の方がより死を考えているという結論も得ていると述べている。死別体験が少ないが死について考えるということは、死別を経験しなくても、あるいは死別を経験していないからこそ死とはどういうものか、考えを巡らすことにつながる可能性も考えられる。一方で、得丸・小林・平・松岡 (2006) では「身近な人の死に立ち合った経験の有無」は「死と死後の不安」と有意差が見られなかったという結果が得られた。園田・上原 (2012) も、死別体験は死生観と死のイメージに大きな影響を及ぼしていないと考えられると述べている。これらの研究から、研究によって死別体験の有無が死別観に影響しているか否か、また影響している因子についてもバ

ラつきが見られ、傾向や特徴がわかりにくい。

丹下（2004）は縦断的に前年と翌年の調査間での死別体験の有無が死に対する態度に異なる影響を与えるかについて検定を行った結果、有意差は示されず、死別体験の有無が特定の方向で死に対する態度の変化をもたらすとは言えないということがわかったが、「死別体験の“有無”は扱ったが“特徴”は扱っていない、という方法上の問題のために差異が示されなかった可能性もある」と述べている。以上の研究より、量的な研究だけでなく、質的な研究からも死生観の特徴を捉えることが重要だと考える。

質的研究

深澤・高岡・根本・千葉（2010）は A 地域の高齢者を対象に、終末期における「生死」に関しての考えを明らかにすることを目標に半構成的面接を行ったあと逐語録を作成し、データを質的に分析した結果、7つのカテゴリーに分類された（表2）。この結果から、深澤ら（2010）は、対象者は人様に迷惑をかけずに自分らしく最後まで生き、死ぬまで元気で過ごし、苦しまずに安らかな自然な最後を終えることを期待していることが明らかになったとしている。

表2 深澤ら（2010）における高齢者の語りから得られた死生観

カテゴリー	サブカテゴリー
苦痛緩和	「痛いのは避けたい」「痛みなく過ごしたい」「辛いので傍らにいてほしい」「痛みを緩和して欲しい」
死の準備	「妻と死について話す」「迷惑をかけず」「身辺整理」「遺言」
延命は望まない	「長生きは望まない」「元気で長生きなら良い」「高度の医療は望まない」
終の棲家	「できれば自宅で最期」「住み慣れた地域」「病状悪化時には病院」
死後の世界	「死後の世界は信じる」「肉親に会える」「死後魂が清められる」「考えたことがない」
平安なる死	「眠るが如き」「自然死」「枯れ木の如き」
死の恐怖感	「死への恐れ」「生と死は共にある」

渡邊・岡本（2006）は、がんで身近な他者を亡くした方を対象に、死別経験による人格的発達（「身近な他者との死別を契機として、自己の洞察を深めるといった心理的プロセスにおけるポジティブな変化」）の内容を明らかにすることを目的として半構造化面接を実施し、死別体験のプロセスに着目して把握するために段階に区切り、分析を行った結果、6カテゴリーに分類された（表3）。また、渡邊・岡本（2006）は「死別に対する積極的関与」と「死別に対する主体的な位置づけ」の視点に着目し、経験した死別を現在どのように捉えているかということ明らかにすることも目的として、死別の捉え方を類型化した結果、6つのカテゴリーに分類された（表4）。これらのカテゴリーに関して、渡邊・岡本（2006）は故人との関係に着目したところ「生前のポジティブな関係は、死別を自己を発達させる経験として主体的に位置づけることに有効に働くとと言えるが、関係の捉え直しや質の捉え直しが重要な関連要因であることが示唆された」としている。

表3 渡邊・岡本（2006）における死別経験による人格発達の内容

カテゴリー	内容
新たな行動の獲得	生や死を考える会の参加など「行動範囲を拡大」したり、次の死別に生かしたいという思いや、遺族の思いを伝えたいといったことが語られていた。
死に対する思索	死別後、様々な側面から「死」に対して思索を行っている。人間の無力さや、死の不可避性、非情さ等が含まれていた。
生（生きること）に対する思索	死別後、様々な側面から「生」に対して思索を行っている。「今後の生き方」を考えるきっかけになったという回答が含まれていた。
他者理解の深化	死別以前と比較して、他者に対してより深い理解ができるようになったという実感がある。
人間関係の再認識	死別後、自分を取り巻く世界において、大切な人間関係を改めて認識している。故人との関係の再確認と、他者一般との関係の再確認が認められた。
自己感覚の拡大	「感謝」や「強さ」、「自己受容」など様々な側面で自己感覚の広がりを感じていたことが示された。

表 4 渡邊・岡本 (2006) における死別の捉え方における類型化

類型	特徴
積極的関与成熟型	看取りにおいても死亡後から現在においても死別に対して自己投影を行い積極的な関わりが認められる。看取りに対して積極的に関わるあまり、心身ともに極限状態であったことや、死亡後にひどい落ち込みが経験されたこと、現在では死別経験が自己を発達させるものとして主体的に位置づけられていること、そして経験を「伝えていきたい」等といった未来への志向が認められた。
見取り後関与成熟型 (対人間葛藤)	看取りを積極的に行いたいと考えながらも故人、もしくは故人以外の身近な人間関係における心理的制約によって積極的に関与できておらず、それが対人葛藤を生んでいる。心理的制約になった相手に否定的な感情を有し、対人間葛藤を生んでいたが、心理学講座への参加などそれを解決するための行動により、現在では対人間葛藤の相手を受容できるように変化し、死別が自己を発達させるものとして主体的に位置づけていた。
見取り後関与成熟型 (個人内葛藤)	看取りにおいて積極的な関与を行っていないが、看取りにおける対人葛藤は経験されていない。死後に個人内葛藤を経験し、それを解決するために勉強会へ参加し「生と死」について積極的に関わる姿勢が見られ、死別を「考えさせるきっかけ」と捉えて死別が自己を発達させるものとして主体的に位置づけられていた。
関与現状維持型	故人へのこれまでの償いの感情などから看取りに関して積極的関与が認められ、看取りに意味付けをする。死後に少しの落ち込みは認められるが、現在ではほとんど意識化されていなかったこと、死別後に死別に対して積極的関与は行っておらず、死別は自己を発達させる経験とは捉えていないことがわかった。
無自覚型	見取りにおいても死亡後から現在においても、死別に対して積極的な関わりは認められない。看取りに積極的に関わらなかったとこに後悔はあるが、それに対する模索が認められず、死別を特に大きな出来事と捉えていないために、自己を発達させるものとしての位置づけは認められなかった。
悲嘆型	死別が自己にとって、どのような経験であったのかを現在模索している。

山田 (2003) は、地域の公民館を使用する中年期から老年期の健常者を対象に、死別体験の意味付けがどのようになされてきたのか、その過程において死別後の自らの変化がどのように捉えられてきたのかに焦点を当て、個々の死別から現在までのプロセスを事例的に検討し、それがどのように関係していきながら、日常生活への適応を促しているのか、意味付けのあり方について類型化を試み、その特徴を明らかにすることを目的とし半構造化面接を行った。その結果、死別体験の意味付けは 3 つの類型に分けられた (表 5)。

表 5 山田 (2003) における死別体験の意味付けの類型と特徴

類型	死別体験の意味付けの特徴	人間的成長の捉え方の特徴
肯定的受容型	自己の変化や現在の生活と結びつけて、死別体験を肯定的に捉えている。死別体験に思い残すことがなく、ある程度の心理的な距離を保ちながら死別体験を振り返ることができる。	「自己の変化」に関する語りが多く、主体的なニュアンスが強い。援助を受けた他者とのつながりに感謝する「人間関係の再認識」もともに語られる。
当惑・模索型	自分自身の人生を揺るがす衝撃的な出来事として捉えており、現在もその感覚が続いている。死者のいない環境を踏まえた上で将来の見通しを立てることはまだ難しい。	人間的成長そのものについて多くが語られない。死別以前と比べて自分がそれほど変わっていないと感じている。
葛藤型	死別の状況や死者への思いについて、様々な感情が入り混じっており、複雑な心境が今も続いている。また、死別体験そのものへの触れられなさを感じている人が多い。	「死への態度変化」「生への感謝」など、人生観・死生観についての変化が語られる。

山田 (2003) は、「死別体験について葛藤を感じ、今も死を意味付ける過程でアンビバレントな感情を抱いている人々のほうが、「その人がなぜ死ななければならなかったのか」「生とは、死とは」という疑問に直面していると思われ」、「死の意味付けを行っていく上で死生観の変遷の過程が非常に重要なものとして体験されていることが示唆された」と述べている。また、「死別以前の自分と現在の自分との違いに気づいていくには、ある程度別体験そのものから距離を取ることのできる客観的な視点が必要と思われる」としている。

渡邊・岡本 (2006) と山田 (2003) の研究は、死別体験後の人格的発達について研究しており、類型の「肯定的受容型」と「積極的関与成熟型」「看取り後関与成熟型 (対人間・個人内葛藤)」は、自己の変化や現在の生活に結びつけて捉えている点や、主体的に考えている点が共通していると考えられる。また、「肯定的受容型」で見

られた人間的成長の特徴では、「人間関係の再認識」が伺える。「葛藤型」と「悲嘆型」においても、現在葛藤しているという点で共通していると考えられ、「葛藤型」で見られた人間的成長の特徴では、「死に対する思索」「生に対する思索」が伺える。これらの共通点から、故人や死別に対し死別体験前後に積極的に関わった人は、死別体験を自らの成長に繋げたり、肯定的に捉えたりすることにもつながりやすいのではないかと考えられる。また、現在葛藤している人たちについては、死別体験からそれほど時間が経っていないということが伺え、死生観形成において重要な時期であるということが考えられる。一方で、「関与現状維持型」「無自覚型」「当惑・模索型」については、死別後に成長に繋げるということはなく、死生観の変わらなさが見られている。「当惑・模索型」については、死別を現在も衝撃的な出来事と捉えており、故人のいない環境を踏まえた将来の見通しを立てることが難しいとのことから、人間的成長の捉え方は違うが、現在葛藤している人と同じで、まだ故人の死に整理がつかない状況である可能性が考えられる。そのため「当惑・模索型」と「葛藤型」の人が、今後、死別体験から時間が経った時に、どのような人間的成長や死生観に繋がるかということも注目すべきだと考える。「関与現状維持型」と「無自覚型」においては看取りの程度や関わりが違っており、看取りに積極的に関わっていても、死生観に影響を及ぼさない可能性も示唆された。しかし、死生観に影響を及ぼしていた他の類型と比べると、死別後の態度に違いが見られ、死別体験に死生観に影響を及ぼすには、死別後の積極的な関わりが重要である可能性が考えられる。なお、本論文で述べる「死別後の積極的な関わり、および関与」は、死別体験後に死や生、死別に対して積極的に考えたり、他者と話したりすること、つまり渡邊・岡本（2006）の注目した「死別に対する主体的な位置づけ」が積極的に行われているかどうかということを目指すこととする。

考 察

死別体験が死生観の変化に影響する要因

渡邊・岡本（2006）、山田（2003）の質的研究から、死別の前後も含めて死別に積極的に関わってきた人は、死別体験を自らの成長に繋げたり、肯定的に捉えたりすることにもつながりやすいことや、死別後にある程度、死や生について考える時間、死別体験を客観的に見ることができるといった距離感が重要だとされ、そういった葛藤が死生観に影響を及ぼしていることが推察された。一方で、死別体験後に死生観が変わらない人もおり、死生観に違いが見られた人たちとの違いとして死別体験後の積極的な関与が考えられる。看取りに積極的に関与していても、死別後に関わらなければ死生観に変化が見られず、また看取りに積極的に関わっていても、死別後に積極的に関わっていくことによって、死生観に変化が見られる可能性が考えられる。このことから死別体験の有無だけで死生観に影響を及ぼすかどうかということは測りきれず、死別体験後の死との向き合い方など、特徴と関連付けて死生観を検討していく必要があると考える。量的研究では、対象者にとって死別体験がどのようなものだったのかということまで詳しく聞くことは難しいため、研究によって死別体験が死別観に影響しているかどうか、影響している因子についてもバラつきが見られるといった結果になっている可能性が考えられる。

死別体験と死生観尺度との関係

渡邊・岡本（2006）の死別経験における人格発達（表3）と死生観尺度（表1）を比べると、「死に対する思索」は死に対する恐怖や不安、死への関心と、「生に対する思索」は人生における目的意識と共通している部分があるのではないかと考えられる。死別前後に故人に積極的に関わり、死生観に変化が見られた人については、死を肯定的に捉えているということから、人生に死が持つ意味を見出していると考えられる。「新たな行動の獲得」や「他者理解の深化」「人間関係の再認識」「自己感覚の拡大」については、本研究で取り上げた尺度と共通しているような部分は見られず、死別を体験し、それを冷静に振り返ったからこそ出てきたものなのかもしれない。これは、一見すると死に注目した死生観には関係ないようにも考えられるが、生にも注目した広義の死生観から考えると、生きる上での質に関係してくるのではないだろうか。そのため、量的な研究では見られなかったが、生きていく上での質を高めるといったことに繋がるのではないかと考えられる。

死別体験後に積極的な関与をしておらず死生観に違いが見られなかった人について、「無自覚型」では「死別を特別大きな出来事と捉えていない」ということなどから、あえて死について考えようとしていない可能性も考え

られ、死を回避している可能性もあると考えられる。このことから、従来の研究では、死別体験が死生観に影響を及ぼすと考えられてきたが、それだけでなく、死生観が死別体験に影響を与えている可能性もあると考える。また、死生観に関する尺度には宗教的な視点や、死への軽視なども含まれており、これらに関しては死別体験がどのように影響を及ぼしているのか本研究では考察することが難しいが、葬儀やお墓参りなどのことを考えると宗教観や、文化的なものとして元々持っている死生観が死別体験、特に死別後の故人に対する関与などに影響を及ぼしている可能性も考えられる。個人にとっての死別体験はどのようなものだったのか、可能であれば、死別体験以前の死生観はどうだったのかというところまでを考察して、死別体験が死生観に与える影響を考えていく必要があるだろう。

総合考察

以上の結果と考察から、死別体験が死生観に与える影響について検討するためには、個人の死別体験がどのようなものであったのかということや、これを考慮する必要があると考えるが、こういった個人による違いというのは、死生観を理解するためだけでなく、臨床現場で実際に死別体験による落ち込みを体験している人などを理解するためにも重要であると考えられる。死別体験をして、現在は肯定的に死別を捉えている人でも、看取りや死別を乗り越えるまでの様々な葛藤を経験していることを理解する必要がある。かといって、死生観に変化が見られなかった人に関しても、故人との死別に対する何かしらの感情がなかったとも言いきれず、どのようなプロセスをたどっていたとしても注意が必要であるということは忘れてはいけない。また、そういった感情の揺れ動きや苦しさに寄り添うことも大切であり、注意が向きがちだが、必ずしも全員が同じようなプロセスをたどっているわけではないため、死別を体験したから何か変化があつて当たり前だと決めつけず、その人個人を理解していくことが重要である。

死別を経て、死別や死生観に向き合い葛藤をしている期間が重要であるということが示唆されたことから、この期間におけるその人の動きや外部からの関わりにも目を向ける必要があるだろう。死別から立ち直るためには、死別後の積極的な関わりとして、死や生、故人について話し合うことが必要なのではないかと考える。死別を体験して辛いだろうからと、その話題を避けるようなことはせず、死別体験について話ができるような場を作ることや、そういった場の存在を提示するなどの働きかけも重要だと考えられる。一方で、そもそも死生観に変化が見られなかった人は、元々どのような死生観を持っていたのか、また、死生観が変化しないことによって、日常にどのような影響を及ぼすのかということについても、今後の研究で検討していく必要があるのではないだろうか。

引用文献

- 海老根理絵(2008). 死生観に関する研究の概観と展望 東京大学大学院研究科紀要 48, 193-202.
- 藤本欣也・本多妙(2003). Death Competency の構造と尺度作成 臨床死生学年報 8, 15-29.
- 深澤圭子・高岡哲子・根本和香子・千葉安代(2010). A 地域の高齢者が考える自らの終末期 紀要 4, 63-68.
- 平井啓・坂口幸弘・安倍幸志・森川優子・柏木哲夫(2000). 死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証－ 死の臨床 23, 71-76.
- 狩谷恭子・渡會丹和子(2011). 看護学生における死生観と死に対するイメージの学年比較 医療保健学研究 2, 107-116.
- 川島大輔(2010). 死生学における質的研究の展開と意義－死の心理学研究を中心に 質的心理学フォーラム, 2, 70-80.
- 隈部知更(2006). 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究－死への態度に影響を及ぼす4因子についての分析－ 健康心理学研究 19, 10-24.
- 京田亜由美・加藤咲子・中澤健二・瀬山留加・武居明美・神田清子(2009). 死を意識する病を抱える患者の死生観に関する研究の動向と課題 群馬保険学紀要 30, 49-58.
- 森末真理(2003). あなたと死－非医療従事者の死に対する意識調査－ 川崎市立看護短期大学紀要 8, 67-76.
- 長崎都子・松岡文子・山下一也(2006). 年代および性別による死生観の違い－非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して－ 島根県立看護短期大学紀要 12, 9-18.
- 仲村照子(1994). 子どもの死の概念 発達心理学研究 5, 61-71.
- 佐藤文子・田中弘子(1989). 死と自殺に対する態度についての心理学的研究－Purepurpose in life test (PIL) を手がかりに－ Artes Liberales 44, 59-77.
- 園田麻利子・上原充世(2012). 看護学生の「生と死」に対しての考え方の推移 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 16,

- 13-21.
- 竹山広美・岡光京子（2018）. 青年期にある学生の死生観に関する研究の文献レビュー 広島国際大学看護学ジャーナル 16, 29-38.
- 田中愛子・後藤政幸・岩本晋・李恵英・杉洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也（2001）. 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学 50, 697-704.
- 田中美帆・斉藤誠一（2013）. 生と死に対する態度研究の概観と展望 神戸大学大学院人間発達環境学研究 研究紀要 7, 181-186.
- 丹下智香子（1999）. 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究 70, 327-332.
- 丹下智香子（2004）. 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究 15, 65-76.
- 得丸定子・小林輝紀・平和章・松岡律（2006）. 日本の大学生における死と死後の不安 日本家政学会誌 57, 411-419.
- 富松梨花子・稲谷ふみ枝（2012）. 死生観の世代間研究 久留米大学心理学研究 11, 45-54.
- 渡邊照美・岡本裕子（2006）. 身近な他者との死別を通じた人格的発達－がんで近親者を亡くされた方の面接調査から 質的心理学研究 5, 99-120.
- 山田淳子（2003）. 死別体験の意味付けと人間的成長－中高年健常者との面接調査から－ 九州大学人間環境学研究院修士論文要旨